

中  
2024

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始まりの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で22ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 始まりの合図で、解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問があるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図で、ただちに筆記用具を置きなさい。

(第2回)



一 次の文章は、江國香織「僕はジャングルに住みたい」の全文です。この文章を読んで、後の問に答えなさい。

夕食のあいだじゅう、恭介はきげんが悪かった。きげんの悪い時、恭介はいつも思う。僕はジャングルに住みたい。

「もうすぐ、卒業式ね」

すきやきのなべにお砂糖をたしながら、お母さんが言った。

「そうしたら、恭介も中学生か」

お父さんが言った。

「まだまだよ。まだ二月だから小学生だよ」

「でも、もうすぐじゃないか。入学手続きだってすませたんだろ」

「うん」

恭介は④ぶつちようづらのまま、しらたきを口いっぱいにはおぼった。

今朝、学校に行ったら、女の子たちがサイン帖ちょうをまわしていた。もうすぐおわかれだね、とか、さみしいね、とか、そんなことばかり話していた。ひとりが、恭介のところにもサイン帖を持ってきた。

「俺、書かないよ」

「どうして」

「だって、さみしくねえもん」

女の子は⑤きまり悪そうにそこに立っていた。

「何だよ。書きたくないんだからいいだろ」

「もういいわよ。暮林くんになんかたのまない」

女の子はサイン帖をかかえたまま、小走りで自分の席にもどった。みんなの視線が恭介にあつまる。

「ちえつ、何だよ」

恭介は A 席にすわった。机の上に、一時間めの教科書と、ノートと、ふでばこをだす。ちえつ、あいつも見ていた。ななめ前の方から、暮林さんのいじわる、という顔をして、恭介を見ていた。一時間めは算数だった。担任の大島は男らしくない、と恭介は思う。たとえば今日だって、

「問五、暮林くん、やってみてくれるかな」  
なんて言う。

「問五、暮林やれ」

がふつうだと思う。恭介は立ちあがった。

「わかりませーん」

と言う。算数はきらいじゃないけれど、今朝はなんとなくいやな気分だったし、わかりません、と言えば先生が自分でやってくれることがわかっていた。

「わからないのかあ。問四の応用なんだけどなあ」

① 先生は頭をかきながら、黒板に問題をといてみた。

「これは基礎だからね。これがわからないと中学に行つて苦労するぞ」

給食は、あげパンと、とん汁と、牛乳とみかんだった。恭介は給食当番で、かつぼう着を着て給食をとりに行く。

「やった。とん汁だ」

恭介は、今までとん汁の日に給食当番になったことが一度もなかった。教室のうしろに立って、一人一人の器にとん汁をつぐ。みんなステンレスのお盆を持って一列にならぶ。あと三人、あと二人、あと一人。恭介はドキドキした。あいつの番だ。

「少しにして」

あいつが言う。恭介は、なるべく豚肉の多そうなところを、じゃばつと勢いよくつぐ。とん汁をみて、あいつはまゆをしかめた。

B

つがれた

「少しにしてって言ったでしょ」

「せんせーっ、野村さんが好き嫌いします」

恭介が声をはりあげると、大島先生はまのぬけた声でこたえる。

「それはよくないなあ。野村さん、がんばって食べてごらん」

野村さんは、大きな目できゅつと、恭介をにらみつけた。

お母さんが、恭介のちゃんんに、くたくたに煮えたすきやきのにんじんを入れた。

「好き嫌いしていると背がのびないわよ」

実際、恭介は背が低かった。野村さんは女子の中でまん中より少し小さく、その野村さんとならんで、ほとんどおなじくらいだった。

「もういらないよ。ごちそうさまっ」

恭介ははしをおいて、二階にあがった。部屋に入るとベッドの上に大の字に横になる。野村さんの顔がうかんでくる。動物でいうならバンビだ、と恭介は思う。三年生の時にはじめていっしょのクラスになって、四年生は別々で、五年生、六年生とまたいっしょになった。野村さんについて恭介が知っていることといえば、保健委員で、とん汁が嫌いで、女子にしては足がはやい、ことくらいだった。今朝あんなことがあつたから、今日は一日、誰も恭介にサイン帖を持ってこなかった。もちろん野村さんもだ。恭介はベッドからおりて、机のひきだしをあけた。青い表紙のサイン帖が入っている。ちえつ、恭介はひきだしをひいて、もう一度ベッドに横になった。

③ 中学にいったら生活がかわるだろうなあ、と恭介は思った。勉強だつてしなくちゃいけないし、先生だつて大島みたいなのんきなやつじゃないにきまつている。野球とか基地ごっこばかりをやっているわけにはいかなくなる。クラスのみんなもばらばらになつてしまふ。あいつなんか私立にいつてしまふから、なおさら会えない。あーあ。ジャングルに住みたい。

ジャングルに住んだら、と恭介は考える。勉強もない、家もない、洋服も着ない。穴をほつてその中で暮らそう。ライオンとゴリラを飼おう。狩りをして、その獲物を食べればいい。皮をはいで毛布にしよう。となりのほら穴にあいつが住んでいて、僕があいつの分も狩りをしてやる。僕とあいつのほかには人間は誰もいなくて、猿とか、へびとか、しまふまとか、ペットっぽくない動物だけが住んでるといい。

★ 恭介が大島先生に呼びだされたのは、次の日の放課後だつた。職員室はストーブがききすぎていてあつい。大島先生は今まで生徒を呼びだしたことなど一度もなかったので、恭介は少しドキドキした。

「わざわざ呼びだしたりして悪かつたね」

先生が言った。

「何の用だと思う」

「わかりません」

「そうだよな。ずいぶん前のことだし」

「はあ」

「去年の春に、遠足に行つたら。あのとき買い食いしたのは暮林くんだけじゃないつて、わかつてたんだ。代表でおこられてもらったんだよ。すまなかつたね」

「はあ」

「話はそれだけだ。もうじき卒業だから、きちんと言つておきたくてね。じゃ、気をつけて帰れよ」

「……は？」

いったいなんなんだ。へんなやつ。恭介は下駄箱でくつをはきかえながら、まだ心臓がドキドキしていた。もちろん、遠足のときのことは恭介もよくおぼえていた。

僕と、高橋と、清水と、それから三組のやつらも何人かいつしよに、アイスクリームを買い食いした。集合の時、僕だけがおこられた。——でも、そんな昔のこともういいよ。教師があやまるなんて、気持ちわるい。ちえつ、大島ともあと一カ月のつきあいだと思うとせいせいする。

大島先生の言葉や態度は、いつも恭介をイライラさせる。すまなかつたね、なんて。もうじき卒業だから、なんて。「あれ」

下駄箱の奥に、白い表紙のノートが入っている。サイン帖だった。

「誰のだろう」

ぱらぱらとページをめくり、恭介はびくんとして手をとめた。あいつのだ。あいつのサイン帖だ。どのページもみんな、なみちゃんへ、で始まっている。なみちゃんというのは野村さんの名前だった。<sup>④</sup> 恭介は、すのこをがたがたとけて校庭にとびだした。冬の透명한空気の中を、思いきり走る。かばんがかたかた鳴る。

家にとびこんで、ただいま、と一声どなると、恭介は階段をかけあがり、自分の部屋に入った。かばんの中からサイン帖をだす。野村さんのサイン帖。一ページずつ、たんねんに読む。おなじような言葉ばかりが並んでいた。卒業、思い出、別れ、未来。

「おもしろくもないや」

声にだしてそう言つて、恭介はノートを机の上に C ほうつた。

その日はそのあとずつと、サイン帖のことが頭をはなれなかった。夕食のあいだも、おふろのあいだも、テレビをみているあいだも、恭介は頭のどこかでサイン帖のことを考えていた。みんなの前で、僕は書かないよつて

言ったんだ。書けるわけがないじゃないか。それなのにこつそり下駄箱に入れるなんて、絶対、書いてなんかやるもんか。恭介はいつもより少し早く、自分の部屋にひきあげた。

ドアをあけると、机の上の白いノートがまっさきに目にとびこんでくる。あーあ。やっぱり僕はジャングルに住みたい。ジャングルには卒業なんてないもんな。そりゃあ、中学にいけないこともあるかもしれない。あいつよりかわいい子がいて、大島よりほんやりした教師がいるかもしれない。でも、それはあいつじゃないし、大島じゃない。僕だって、今の僕ではなくなってしまうかもしれない。恭介は机の前にすわり、青いサインペンで、ノートに大きくこう書いた。

野村さんへ。

⑤俺たちに明日はない。暮林恭介

(注1) いつか観た映画の題名は、そっくりそのまま今の恭介の気持ちだった。

次の日、恭介がサイン帖をわたすと、野村さんは、

「ありがとう」

と言ってにっこり笑った。机のひきだしにしまつてある自分のサイン帖のことが、恭介の頭をかすめた。あいつの下駄箱に入れておいたら、あいつは何て書いてくれるだろう。女の子だから、やっぱり思い出とか、お別れとか、書くんだらうか。⑥恭介は、首のあたりがくすぐったいような気がした。教室の中は、ガラスごしの日ざしがあかるい。

「おはよう。みんないるかあ」

教室に入ってきた大島先生が、いつものようにまのぬけた声で言う。もう三月が始まっていた。



(江國香織「僕はジャングルに住みたい」による)

【語注】

- 1 　いつか観た映画の題名　……  
「恭介」がノートに書いた「俺たちに明日はない」という言葉は、  
一九六七年に制作されたアメリカ映画の題名のこと。

問一

A

C

ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア どっと    イ ぽんと    ウ なみなみと    エ どすんと    オ ふかぶかと

問二

——部①「ぶつちようづら」・②「きまり悪そうに」・③「まゆをしかめた」の本文中における意味として  
もつともふさわしいものを、次の各群から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① ぶつちようづら

ア 子供らしい無邪気な顔    イ 穏やかで動じない顔

ウ 落ち着いて大人びた顔    エ 無愛想で不機嫌な顔

② きまり悪そうに

ア 自信がありそうに    イ 怒っているように

ウ 気恥ずかしそうに    エ 悩んでいるように

③ まゆをしかめた

ア 好意を抱いて表情をゆるめた    イ 喜びを感じて表情をくずした

ウ 不快に感じて表情をゆがめた    エ 衝撃を受けて表情をなくした

問三 — 部①「先生は頭をかきながら、黒板に問題をといてみた」とありますが、このときの「大島先生」の

気持ちとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 今まで必死に教えてきたことが無駄であったと思い知らされて、怒りを感じている。

イ 基礎的な内容の算数の問題が分からないと生徒から言われて、困ってしまっている。

ウ 自分の教え方が不適切であったことを生徒から指摘されて、恥ずかしく思っている。

エ 解けるはずの問題を解けないと生徒から言われて、子供の反抗を不快に感じている。

問四 — 部②「今朝あんなことがあったから、今日は一日、誰も恭介にサイン帖を持ってこなかった」とあり

ますが、「あんなこと」とは、どのような内容を指していますか。それについて説明した次の  X に適する表現を、本文中から二十字以内でぬき出して答えなさい。

サイン帖について、 X こと。

問五

——部③「中学にいったら生活が変わるだろうなあ、と恭介は思った」とありますが、本文では、中学校の入学を間近に控えた「恭介」たちの日常が描写されています。次にあげた出来事を、時間の経過にそって整理するとどのような順序になりますか。順に記号で答えなさい。

ア 家の夕食ですきやきを食べた時、恭介のちゃんわんの中に、お母さんがくたくたに煮えたすきやきのりんじんを入れた。

イ 放課後に大島先生から呼び出され、去年の春に遠足に行った時、恭介だけを買食い食いの件でおこったことを謝られた。

ウ 学校で女の子たちがサイン帖をまわしていた時、恭介にもサイン帖を持ってきたが、自分は書かないと言って断った。

エ 恭介が給食当番の時にとん汁が出たため、豚肉の多そうな部分を、ドキドキしながら野村さんの器に勢いよくついだ。

オ 恭介は、二階にあがって自分の部屋に戻り、机のひきだしをあけて、自分のサイン帖が机の中に入っているのを見た。

問六

——部④「恭介は、すのこをがたがたとけつて校庭にとびだした。冬の透명한空気の中を、思いきり走る。かばんがかたかた鳴る」とありますが、このときの「恭介」の気持ちとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 大島先生の生徒に対する優しすぎる態度や、改まった謝罪に反発する気持ちを持っていたが、野村さんからサイン帖をもらえたことで、卒業を前に前向きな気持ちを取り戻し、今すぐにサイン帖を書きたい気持ちが高まっている。

イ 野村さんからサイン帖をもらえて、うれしい気持ちになったが、女の子たちにサイン帖は書かないと言ってしまったため、学校でゆっくり見ることはできず、一刻も早く家に帰って、サイン帖をじっくり読みたいと思っている。

ウ 算数の時間においてるように指名したり、以前の遠足で買い食いを注意した件を今になって謝罪したりと、大島先生の言動にイライラしていたが、野村さんからサイン帖をもらえたことで、気持ちが晴れ心が落ち着いている。

エ 生徒の成長を見守ろうとする姿勢が見られない学校に、だんだんと不満を感じ、学校生活に希望が感じられなかったが、野村さんからサイン帖をもらえて、友達から慕われていることがわかったことで、気持ちが変化している。

——部⑤「俺たちに明日はない」とありますが、この表現について、生徒A～Dが授業で感想を述べ合いました。本文の内容を正しく読み取っている感想を次から選び、記号で答えなさい。

**生徒A** 恭介は、学校という環境になじめず、野村さんと二人だけの世界に行きたいと本気で思っているんだね。その思いを劇的に伝えようとして、映画の主人公になったつもりで語っているんだと思うな。恭介が真面目であればあるほど、映画の題名を使った表現の仕方に、かえっておもしろさが感じられるよ。

**生徒B** 恭介は、サイン帖なんて書かないとみんなに言ったのに、野村さんにだけは映画の題名を書いて渡すことで、野村さんに対する好意を伝えているんだと思うよ。ただ、恥ずかしい気持ちを隠すために、わざと大げさな表現によって自分の気持ちにうそをつけていて、その様子がおもしろく好感が持てるね。

**生徒C** 恭介は、野村さんからサイン帖をもらったことで、自分に対する好意を感じたんじゃないかな。だから、サイン帖を見て卒業しても野村さんとまた会えると実感し、そうした高ぶった感情を映画の題名に託して示しているんだね。大人びた言葉を用いた表現が、どこかおもしろく感じられるなあ。

**生徒D** 恭介は、小学校を卒業したら、現在の自分たちの状況が変わってしまうと思いい、これからの中学校生活にも期待が持てないんだと思うな。そうした思いを、恭介は映画の題名を借りて野村さんに伝えているね。その言葉は、恭介の真剣な気持ちなんだろうけれど、大げさな表現がおもしろく感じられるよ。

問八

——部⑥「恭介は、首のあたりがくすぐったいような気がした。教室の中は、ガラスごしの日ざしがあかるい」とありますが、このときの「恭介」の気持ちとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 中学校でも、今と変わらない友達や先生と過ごすことを望んでいた恭介が、野村さんのサイン帖に映画の言葉を残したことをきっかけにして、だんだんと周囲の変化を積極的に捉えられるようになったため、生活に明るさを取り戻している。

イ 卒業を前に、別れ難さを感じる人々の中で、自分の将来について迷っていた恭介が、野村さんのサイン帖に映画の言葉を残したことをきっかけにして、小学校を卒業したら、以前よりは精神的に自立しなければならぬと決心している。

ウ 小学校を卒業したら、野村さんと離れなければならないと思っていた恭介が、野村さんのサイン帖に映画の言葉を残したことをきっかけにして、その現実をより強く意識してしまい、残された日々を友達とどう過ごすべきか悩んでいる。

エ 卒業がだんだんと迫ってくる中で、周囲のものが変化していくことを受け入れられずにいた恭介が、野村さんのサイン帖に映画の言葉を残したことをきっかけにして、これからについて以前よりは前向きに考えられるようになっていく。

問九

本文において、「野村さん」や「大島先生」のことを、「恭介」が実は大切な存在として捉えていることが読み取れます。そのことがわかる連続した二文を★印より後の本文中から探し、はじめの五字をぬき出して答えなさい。

問十 本文では、「ジャングルに住みたい」という表現が三度用いられています。この表現に込められた「恭介」

の気持ちとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 恭介は、自分の思ったことを言葉にできず、友達とうまく関係が築けない自分自身にいらだちを感じており、空想の「ジャングル」という世界で理想的な自分の姿を演じている。

イ 恭介は、生徒の成長を見守ろうとせず、柔軟な姿勢が見られない学校という環境に嫌気がさし、自分の想像の中で学校の存在しない「ジャングル」という世界を思い描いている。

ウ 恭介は、離れたい人々と過ごしている自分の環境が、卒業によって変化してしまう現実になんとも耐えられず、現実から逃げられる「ジャングル」という世界にここがれを抱いている。

エ 恭介は、自分の思い通りにならない今の生活から、すぐにでも逃げ出したいと考えており、自分の思うままになる「ジャングル」という世界へ行きたいという願望を抱いている。



二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「いのち」は、どこにもあります。むしろ、私たちは「いのち」に包まれて生きている、といってもよいくらいです。塔和子（とうわすこ）（一九二九～二〇一三）という詩人の「音」と題する作品を紹介したいと思います。

私には  のです

私の奥深くあつて

静かに流れている

いのちの音が

① 私がまだ始まらぬまえから

始まっていたいのちの音

座っていると

その音は

永遠の宇宙から

愛しく哀しく

私の皮膚に包まれて

こだましせまってくるのです

そして

私は

かまきりのような  
さびしい目をして

じいっと

②それをさいているのです

(塔和子『希望よあなたに——塔和子詩選集』編集工房ノア)

「いのちの音」は、「私」が生まれる前から存在して、「私」にも受け継がれている。人は誰も、大きなのちとつながっている。その「音」は、からだの奥深くから響いてくるというのです。

この詩人は、その「音」をあるときは哀しみのなかに、またあるときは、悲哀を越えた「愛しみ」を感じながら聴いている、と書いています。

③「かなしみ」は、「悲しみ」や「哀しみ」だけでなく、「愛しみ」、「美しみ」と書いても「かなしみ」と読みます。詩人の中原中也（一九〇七～一九三七）は、「愁しみ」と書いて「かなしみ」と読ませています。

「いのちの音」をこれほどありありと歌い上げた作品をほかに知りません。私は、この詩によって「いのちの音」という言葉をほんとうに知るとともに、いのちの世界への扉が開かれた思いがしました。この詩人と広い意味での同時代人であったことを誇らしくさえ感じます。

④詩情は、「いのちの音」をつかみとろうとする私たちの本能です。本能ですから、それは万人に備わっています。詩情は、あった方がよい、というものではありません。なくてはならないはたらきです。

また、詩情に目覚めていないと、自分の気持ちの深みに気がつかないことがあります。自分はこんなに悲しんでいる、苦しんでいる、ということに気づかない、もちろん他人が苦しんでいることにも気づかない。

しかし、ひとたび気がつきはじめると、なかつたことにはできません。

(若松英輔『詩を書くってどんなこと?』平凡社)

問一 Xに入る語として、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 大切な    イ 見える    ウ 分かる    エ 聞こえる

問二 — 部①「私がまだ始まらぬまえ」とは具体的にどういふことか、「——前」に続くように文章全体から四字で抜き出し答えなさい。

問三 — 部②「それ」とあるが、「それ」が指し示す語句を詩の中から抜き出し答えなさい。

問四 — 部③のように、同じ読み方をする漢字でも、意味が異なる場合がある。次の漢字の使い方として、もつともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

学問を (ア 修める    イ 収める    ウ 納める    エ 治める)

問五 — 部④「詩情」の説明として、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア すべての人にわけへだてなく与えられている力であるため、本能的に心の深みを読み取れる。  
イ すべての人の中にあるとは限らず、それを見つけて出すことで心の深みに気づくことができる。  
ウ すべての人の中に宿っている力で、それを開花させることで心の深みに気づくことができる。  
エ すべての人に眠っている力であり、他者の苦しみを理解することによって目覚める力である。

問六

この詩の感想について話し合っている。次のA～Dの四人の発言の中で詩の内容の読み取りが、あきらかに間違っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

Aさん いのちを宇宙に例えることによって、私たちを包み込んでいるいのちの大きさを、よりいっそう感じることができた詩でしたね。

Bさん 「私がまだ始まらぬまえから始まっていた」「永遠の宇宙」という表現を用いることで、いのちの大きさを感ぜると同時に私の存在の小ささも感ぜるな。

Cさん 〈大きさ〉と〈小ささ〉だけでなく、いのちの音の「こだましせまってくる」という表現と、私の「じいっと」という表現によって、〈動〉と〈静〉の対比も際立っていると思う。

Dさん この詩では、いのちを一面的な感情で感じ取っているのではなく、多面的な感情で感じ取っていると見えそうですね。

問七

この詩の特徴について述べたものとして、間違っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

A 「じいっと」のように、様子や動作を表す擬態語が使われている。

I 「奥深く」「静かに」のように、対照的な内容のことはを並べる対句が使われている。

ウ 「始まっていたいのちの音」のように、文の終わりを名詞で止める体言止めが使われている。

E 「かまぎりのようなさびしい目」のように、あるものを何かにたとえる比喩が使われている。

問八 次の文章を読んで、後の(1)と(2)の問いに答えなさい。

この詩は①現代の言葉で書かれた詩であるが、一方で、昔の言葉で書かれた詩もある。しかし、昔の言葉といつても、実は私たちが普段使うような表現の中にも、②昔の言葉や用法が使われているものがある。例えば「若き命」といった表現である。「かがやけ若き命」のようなキャッチフレーズを目にすることがあるが、現代の言葉の用法で表現するならば「若い命」となる。このように言葉には昔からのつながりがあり、古い日本語は意外と私たちの身近なところに生きているのだ。

(1) ——部①の詩を何というか、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 伝語詩    イ 文語詩    ウ 口語詩    エ 現語詩

(2) ——部②とあるが、昔の言葉や用法が使われていることわざを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 急がば回れ    イ 噂うわさをすれば影かげ    ウ 犬も歩けば棒に当たる    エ 朱に交われれば赤くなる

三 次の空らん①～③に当てはまるもっともふさわしい語句を、あとの語群から選び、記号で答えなさい。

私たちの生きる社会では、決断しなくてはならないことがたくさんある。しかし、何かを一つに決めることはとても難しい。人はそれぞれ、異なった意見や考え方を持っていることもあるからだ。例えば、古くからの制度や考え方などを新しく変えようとする①な考え方がある一方で、それとは対照的に、古くからの制度や考え方を重んじ、急激な変化に反対する②な考え方もある。このような中で大切なことは、話し合いだ。自分の意見や考えを一方的に押し付けたり、暴力によって従わせたりせず、本能や感情に左右されない③な話し合いが、この社会では求められる。

ア 主観的    イ 保守的    ウ 感覺的    エ 客観的    オ 革新的    カ 理性的

四 次の①～③の文と、もっとも関連のある慣用句・ことわざをそれぞれあとから選び、記号で答えなさい。

① ほとんど宣伝していないにもかかわらず簡単に商品が大ヒットした。

ア 漁夫の利

イ 雨だれ石をうがつ

ウ 歳月人<sup>さいげつ</sup>を待たず

エ ぬれ手で粟<sup>あわ</sup>

② いくら注意しても聞こうとしない人に何を言っても効果がない。

ア かつばの川流れ

イ のれんにうで押し

ウ 赤子の手をひねるよう

エ せいてはことをしそんじる

③ 試合でミスをしてしまいすっかり元気をなくしてしまった。

ア 青菜に塩

イ 舌を巻く

ウ 虫の居所が悪い

エ 顔から火が出る

## 五

——部の漢字の読みを答えなさい。

① 平|静|な|口|調|で|話|す。

② 健康な状態を|保|つ|ことが大切だ。

③ 大きな|志|を持つ。

④ この地域は|養|蚕|業|が盛んだ。

⑤ めったにない|代|物|だ。

六

―部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① イギのある話し合い。
- ② 車がコシヨウする。
- ③ 国会のシツギ応答。
- ④ パーティーにシヨウタイされた。
- ⑤ 目標は学級のソウイで決める。









